

1992.1.1 No. 3517

# ○歴史が動き始めた

「」の好機を逃さず、反転攻勢へ！」——新たな年の勢頭にあつて、われわれは、このスローガンを高々と掲げることができる。歴史が大きく動きだした。時代が、猖獗をきわめて激しく変動をはじめた。ひとつの時代が過ぎ去つた後で語ることはたやすいことかもしれない。しかし、激しい諸事件がしぶきをあげてぶつかり合う、歴史の転換点の最中にあって、何を決意し、その道ゆきにどのような方向を定めることができるか

は、言葉で語るほどたやすいことではない。

しかしかれわれは、自らの力を信じ、いかに困難なときにも常に闘いの渦中に身をおいて、労働者としていかに生きるべきか、本当の労働組合とは何かを追求し、多くの血を流しながら、何物にも代えがたい、勝利への道すじを学びとつてきた。われわれは、自らの闘いの軌跡こそが、「変革の九年」の指針となつていることをはつきりと確信することができる。

## ○労働者——そが 変革の担い手として

「湾岸戦争」に始まつた九一年は、ソ連邦の崩壊・消滅で幕を閉じた。このようなことを誰が予想しただろうか。戦後四十数年間にわたる米・ソを軸とした世界体制が、蓄積された矛盾を一挙に噴き出しながら、落日を迎えていた。この嵐は、全てのものをのみ込んで進んでいる。社会全体がとてつもない地殻変動を開始しているのだ。分裂と対立と危機の噴出、戦争の危機がすごい勢いで増殖している。

しかし、ただひとつ明らかには、ひとたび変動を開始した歴史は、もとの鞘には戻らないといふことである。この歴史的激動は、世界の支配者どもの思惑をこえて、想像もつかないような世界史的変革に向けて発展せざるを得ないことは明らかだ。そして、労働者こそが、この変革の担い手として登場しなければならない。労働者が歴史の創造主として、高々とその旗を掲げるときが到来しようとしているのである。

## ○針路を見失つた 者は誰か

すでに革マル・松崎の牙城東日本

の足元にまで及んでいる。資本にこびへつらい、魂まで売り渡したJR総連・革マルは、飼い主によつて捨て去られるという、最も相応しい末路をたどつたのである。

「JR体制」も世界・日本をめぐる激震と期を一にして、激しく揺らぎはじめた。

“JR総連瓦解”の火の手は、すでに革マル・松崎の牙城東日本

の足元にまで及んでいる。資本にこびへつらい、魂まで売り渡したJR総連・革マルは、飼い主によつて捨て去られるという、最も相応しい末路をたどつたのである。

# ○総破産した 分割・民営化

そればかりではない。国鉄分割・民営化は、五年目にして、「総破産」とも言うべき状況にたち到了つた。バブル経済の終焉に伴つて、株式上場が不可能となり、累積債務問題の解決が、完全に暗礁に乗り上げたことを発端に、新幹線保有機構の解体と「鉄道整備基金」の発足、JRの経営危機の表面化、

そればかりではない。国鉄分割・民営化は、五年目にして、「総破産」とも言うべき状況にたち到了つた。バブル経済の終焉に伴つて、株式上場が不可能となり、累積債務問題の解決が、完全に暗礁に乗り上げたことを発端に、新幹線保有機構の解体と「鉄道整備基金」の発足、JRの経営危機の表面化、

# 開春

## ○好機到来！92年に 反転攻勢の年に

JRは、こうした状況に直面し

て、壇をきつたように、「第一の

分割・民営化」とも言うべき大合理化攻勢を開始している。われわれは、すでにこの攻撃に対し、昨年十一・一二一一六ストをもつて、反撃の闘いの火ぶたをきつている。

全国の国鉄労働者の怒りを代表して闘いぬかれたこのストライキは、火花となり、種子となつて、全国

われわれは、ただちに、「五万体制」打倒に向けて、新たな闘いを開始する。われわれにとっては、分割・民営化体制反対闘争は何ひとつ終わつてはいない。敵の側の矛盾は、いたるところでほづれ、爆発寸前である。まさに好機到来

！この十年間の屈辱と苦しみ、積

みり積もつた怒りの全てを解き放つて闘いに起とう。全国の仲間た

一九九二年一月一日

国鉄千葉動力車労働組合  
執行委員会